

伏見・指月城の復元

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



立売通と豊後橋通交差点の石垣 (3の調査)

南北方向(写真左、北東から)と東西方向(写真右、南東から)の石垣が見つかった。それぞれ西と北に面を向ける。割石を使用した古い特徴をもつ石垣で、石材の大きさは50~130cmもある。上部には1m以上の整地層を積み上げる。

指月の岡は宇治川に臨む丘陵の南端に位置します。古来より風光明媚な土地として知られており、室町時代には皇族の伏見宮家の邸宅が営まれました。現在も伏見宮家ゆかりの光明天皇らの陵墓である大光明寺陵が指定されています。

天正19年(1591)、豊臣秀吉は岡の位と京都での居城であった聚楽第を築く秀次に譲り、太閤となります。そして、文禄元年(1592)には指月の岡に隠居のための屋敷を造営します。ところが実子・秀頼の誕生により秀次との関係が微妙なものとなると、文禄3年

(1594)には天守などを備えた城郭として屋敷の拡張整備を開始します。これが指月城です。秀次が失脚・自害した後も指月城の整備は続けられ、文禄5年(1596)にはほぼ完成しますが、7月に起こった慶長大地震により建物が倒壊、多数の死者を出す大惨事に見舞われます。この結果、秀吉は北東側の木幡山に新たな城郭(木幡山城)を建設し、周囲に大規模な城下町の造営を進めることとなります。指月城と木幡山城の両者を総称して伏見城と呼んでいます。

指月城が推定されている場所は、

現在は団地などが建ち並ぶ市街地となっており、地表には明確な痕跡が残っていません。全体的には北東から南西へ傾斜する地形で、南側は宇治川北岸の崖、東側は舟入と称される幅約100mもある人工的に掘削された窪地により区画されています。周囲との高低差は約20mもあり、南側へ城郭が広がることは考えられません。一方、北側は立売通を挟んで両側から落ち込む段差や斜面、西側は西へ向けて低く傾斜する地形を造成した巖塊状の地形が続いています。また、推定地内にも数箇所の段差



指月城推定復元図

があり、復元にあたって意見が分かれています。

これまで指月城推定地での発掘調査は、立売通沿いの3箇所で行なわれました(指月城推定復元図)。

1の調査では慶長10年(1605)の火災層の下面で、桃山時代の立売通路面・北側溝、6棟の建物などが見つかりました。木幡山城の時期に属し、下層には遺構があり



立売通北側の調査 (2の調査、北から)
調査区南の礎石部分の下層に堀が推定できる。立売通の向う側には段差がある。

ます。2の調査では粘土層を挟む2面の桃山時代の遺構が見つかりました。下面には南に落ちる段差があり、段差下部の整地層の下層は深さ1.5m以上の大規模な遺構となります。この段差と立売通南側の北へ落ち込む段差との間隔は約20mになり、ここに指月城の北堀が推定できます。

3の調査は立売通と豊後橋通の交差点南東角にあたります。地表下約1.6mで北と西に面を向ける石垣の北西角が見つかりました。大型の石材を3段以上積み上げており、上部は壊されていますが、2m以上の高さがあったと考えられます。石垣の北側には水分を含んだ土層が堆積しており、北堀と見つかっていないため未解明ですが、指月城の範囲が復元できたことにより、また一步、研究を進めることができました。(山本雅和)

城の北西角が見つかったと考えています。出土した遺物の時期も矛盾しません。

2・3の調査成果から指月城の規模は舟入から豊後橋通までの東西約500m、立売通から宇治川北岸の崖までの南北約250mに復元することができます。北側には幅約20m、深さ2m以上の堀がありました。1の調査は堀の北側にあたるのでしよ。西側は段差に石垣を築いており、おそらく城郭の正面となる大手となっていました。

伏見城は豊臣秀吉が最後に築いた城で、当時の築城技術や政治権力のあり方を考えるにあたって非常に重要な遺跡です。指月城の内部の構造は、金箔瓦などが出土しているもの、目立った遺構が見つかっていないため未解明ですが、指月城の範囲が復元できたことにより、また一步、研究を進めることができました。(山本雅和)